

平和学の実戦

多賀秀敏

(昭和 43 年卒 早稲田大学社会学部教授、社会学部学術院長)

平和学とは平和の実現に向けて科学的見地から研究し、その成果を広く実践に移す学問。平和とは何か？戦争の反対、争いのないことか。それは一部分である。

中国、日本、ローマ、ギリシャ、ユダヤなどで平和の概念を調べた人がいる。ユダヤはシャロームだが、それは「神の正義を勝ち取ること」。それをかなえるためには戦争も必要というのが本意。ギリシャは秩序立っていること。インドはシャンティ、それは心の静穏。インド人の学者は平和 (Peace) の反対は平和でないこと (Peacelessness) と唱えた。当初は何を言っているのかという反応だったが、確かに戦争が無ければ平和だろうか？

インドは戦争がない。だから平和か？そんなことはない。貧困で死んでいく。子供は麻疹にかかる。麻疹は医者にみせれば直る。けどお金がないから医者にいけない。子供は徐々に苦しみながら死んでいく。そう、麻疹で亡くなったのではない。貧困で亡くなったのだ。これで平和か。

そうなのだ、戦争が無くてもイコール平和ではないのだ。

今、世界で 10 億人は貧困なのだ。世界の 7 人に一人は貧困で、その結果から生ずる飢餓が世界の死亡原因になっている。この世界では 6 秒に一人がそれで死んでいる。

もし人間の寿命が 80 歳ならば、50 歳 (世界の平均寿命) で死ぬことは 30 年分の構造的暴力 = ”社会構造にビルトインされた暴力” によって平和の状態が失われているとも言える。こういう暴力にも目を向けないといけない。平和学の学問分野はどんどん広がっている。

統計も図にすると理解しやすいので、いくつかの統計で説明したい。(パワーポイントの資料ももらっておらず、しかも一番後ろで聴いていたから理解できないところもある)

●<年度を横軸にし、戦争・内乱による死者の数を棒グラフにし、内訳として兵士、民間人に色分けしたグラフ>

さて、平和の一つの対語の戦争であるが、このグラフは毎年の戦争・内乱で死んだ人の数を示している。その内訳として兵士と民間人に色分けしている。(第 2 次大戦以降も死者の数は増えているのにびっくり。そして内訳も民間人の死者が圧倒的に多くなっている)

太平洋戦争でも日本の民間人が沖縄や原爆も含めた空襲で多く殺されたが、驚くべきことに、ベトナム戦争以降は兵隊が死ぬのより民間人が死ぬ方が多いのだ。ベトナムでは 2% が兵隊で残り 98% は民間人なのだ。冷戦が終わり、国内紛争でこれだけ民間人が死んでいる。

●<上下にグラフを作る。年度を横軸にし、上のグラフは世界の軍事費総額、下のグラフは世界の教育費総額>

上が軍事費の総額の推移だ。これに対して下が教育費の総額の推移だ。何十分の一だ。(本当に軍事費に比べて、あまりに少ない教育費の推移に驚く。軍事費の多さに驚くべきか?)

●<よくわからない図だったが爆薬の量の図>

第2次世界大戦とそれ以降の戦争で使われた爆薬の総量はTNT火薬で11メガトン。それが今、世界で蓄積されている爆薬の総量は8000メガトンと言われている。

●<横軸は古代から現在までの年度軸、そこに折れ線グラフで世界の人口をプロットしたグラフ

世界の人口はこのように長い間安定していた。それが近代になって急激（垂直的と見えるほど）に上がっている。20世紀はじめに世界で12億人が、2050年には91億人に達すると言われている。酸素の量等も限られている中で、いつか滅亡するのは必至だろう。

（第2次世界大戦後、急にグラフは立ち上がっている。それまではほとんど横ばいだったのが、急に垂直になる感じ。最近の雑誌に人類100億人限界説の記事見出しが載っていた）

FAOの統計にあるが、食品は日本が最大の輸入国であるが1200万トンも廃棄している。世界最大の食糧廃棄国だ。一方で世界は594万トンが欠乏している。これは何だ。

これでいいのか。このような現実を見据えて実践し、実戦の場に出てもらいたい。

教育だって同じだ、君たちは信じられないくらい恵まれている。大学に行けるのは世界で2～3%なのだ。自分はベトナムで学校を作るプロジェクトを実施した。ベトナムでは子どもたちも昼間は働かなくてはならない。そこで先生も早朝に来て教育している。この時、子供達に私は「君たちにお菓子などは与えないが、未来をあげよう」といったら目の力が出た。教育が無ければ未来はひらけないの事を子どもはわかっているのだ。

世界は5人に一人が1日1ドル以下で生活している。これは購買力平価も加味した値である。本当の意味での1ドルのことだ。この現実を君たちは想像できるか。

最後に、こういう中で君たちは、自分が何もできないとか考えずに、「自分が何が出来るか」を考えてほしい。

<先生、学生の質問に答えて>

○なぜ先生は平和学を志したか？ ○今、自分たちはどうすべきか？

<答え>

個人的なこともあり、答えにくいですが、卒業した年は大学紛争がまさかりの時であった。自分は父（内務省に勤めていた）から「勉強は人のためにするもの」と教わった。世の中に出たから「勉強は自分のためにする」という発想をする人が多く、驚いた記憶がある。この社会に生きている人も人の為に仕事をしている。パン屋さんは自分で食べるためではないのだ。”人のため”ということを考えて欲しい。

この世界の現実先ほど話をした通りだ。だが、修正可能な世界に生きていることを忘れないでほしい。あきらめないで欲しい。

とりあえず想像力を働かせて欲しい。あなたが、今、やっていることで地球の裏側でどういうことを引き起こしているのかと。イメージーションを働かせて欲しい。

（文責：伊藤三平）